



寒い季節に思い出すことがあります。小学5年の時、父の転勤でアメリカから日本の学校に転校しました。3学期の始業式の日、ジーンズを履いて登校した私は、朝礼の時、全校児童の前に立たされ、「悪い例」として紹介されたのです。言葉がわからず何が起きているのか理解できませんでしたが、私に通っていた学校は「長スボン禁止」で、半スボンかスカートと決まっていたのです。

服装も髪形もピアスさえも、自由なアメリカにいた私にとって、「協調性を重視する」日本文化の洗礼を受けた体験でした。健康診断の日、みんなが洋服を脱いで出席番号順に廊下に並びました。全員が同じ白い下着でびっ

りなくしました。対して、私は赤いパイル生地の下着とTシャツ。学校中に知れ渡り、恥ずかしい思いをしました。中学校も校則は厳しく、朝礼で先生が定規を持ち、女子のスカート丈を測りました。男子の少し耳にかかっている髪を先生が切ることもシヨックでした。

でも、私は制服を着てもみんなと同じには見えません。髪の色は違おうし、言葉も不自由だったので簡単に溶け込めず、自信をほとんど

忘れました。小さな声で話し、虫眼鏡で見ないと読めないほど小さな字を書くようになりました。「自分は間違っていたことをしているのではないか」といつも不安に思うようになりました。大人になつた今もあの当時の不安な気持ちは忘れられません。

学校の制服とは少し意味合いが違いますが、ロンドンでの会社員時代、同僚女性から「サインして」と渡された紙に「女性も希望すればスボンが履けるようドレスコード(服装の基準)を変更してほしい」と、会社への要望が書かれていました。雪が降ってもスカート

門倉多仁亜



多様性社会と制服、校則

で出勤しなければならぬ女性たちは怒っていました。数週間後、会社から「オフィスにいる女性はスボンで構わないが、営業職はスカートとブラウスという今まで同様のドレスコードを維持する」との回答を得ました。

「社員の第一印象は会社の信用に関わる」という説明は理解でき、話し合いの結果、互いに歩み寄りができたと感じる出来事でした。日本の学校に制服が導入されたのは明治時代。制服の利点として格差をなくすことが挙げられますが、一方で高価な制服代を準備す

るため苦勞する親御さんもいます。多様性が問われる社会で、制服や校則の意義も変わっていくと思います。今、鹿児島県内の公立小中学校や県立高校でも校則を見直す動きが進んでいるようです。何より、どんなテーマでもみんな

風は冷たいですが、店先に並ぶイチゴが春に近いことを教えてくれます。ハタをとり、半分か4等分して砂糖、レモン汁を振りかけて冷蔵庫に一晩おけば、イチゴソースの完成です。スライスしたバナナや柑橘とあえてフルーツサラダに、チーズケーキやアイスにかけてデザートにと、便利なソースです。真っ赤な色が心を元気にしてくれますよ。

かどくら・たにあ氏 料理研究家。兵庫県生まれ。父は日本人、母はドイツ人。英国滞在中に料理製菓学校ル・コルドン・ブルーで学ぶ。食だけでなくドイツ生活の経験を踏まえたシンプルライフをテレビや雑誌で発信している。鹿屋市在住。